松江での直販

蟻穴が堤を穿つごとく

それは9月9日のことでした。夏の弥栄のワークキャンプに参加及び参加はできなかったけど弥栄に色気を感じている松江在住の人達が市内の某所に集まったのは。

学生・教師・百貨店員・半高校生・浪人者等がその顔ぶれでした。弥栄の印象、自分にとって弥栄とは何んなのか、又弥栄にとって自分とは、等をテーマにしました。いろいろ話は出たけどここでは割愛。さて話がとぎれたころ、直販を15日にやりたいと言っとるけど、どうしょうかということを言ったとたん、座はパッとしらけてしまう。弥栄の運動を把えきれてないのに、直販に関わられへん、主婦に対して責任ある態度が取れないというのが大半の人達でした。

しかし、『まあ、何んでもええからやってみようやないか、やらんことには何にも始まらへん』ということで、関わるかどうかは個人の意志に任せることにしました。これでその日は散会。

さて、日が迫っているので準備が大変。まず場所は、団地がいいだろうと大学横の公務員住宅に白羽の矢をたてました。どうは、広島での直販ニュースを参考にして、「松江の皆さん」に始まって、弥栄のあらまし、訪問の招請、今回取り扱う品々

弥栄之郷共同体日記抄

～キャンプ以後からこれからのことまで～

9月11日　キャンプが終ったので数人で浜田に下りる。コーヒーを奢む人、街で買い物する人、映画を見る人、レストランで肉を食る。

9月12日　ポリ撃退法の講習会。瓶爆質問にどう対処するか。刑訴法と警瓶法の学習。特別公務員暴行凶器用罪へ刑法(暴)は覚えておこう?

9月14日　はじめての松江での直販。今までと変った点、マイクで呼びかけたこと、プラカードを持ってデモしたこと。

9月18日　雨。近所の人が二人酒をぶら下げて遊びにくる。

9月23日　待望のイネ刈り。早稲の分を全部刈りとる。

9月24日　ヤマシ、広島での幸福学園研鑽会に参加するため、弥栄のパンフをどっさり抱えて出発。

9月26日　われわれの共同体運動にとっての民俗学の意味・有効性について長さんが一時ぶつ。

10月1日　集団わっぱに出入りしている米山君来る。

10月2日　広島消費者協会のバザーの会場で直販。まるで共同体直販の会場のようになる。新しい販売先もできそう。東京のノブちゃん肉をどっさり買って来る。

10月3日　ユキちゃん神戸から来る。共同体への特参金(?)の2万円を出して共同体会計が豊かになる。女性が大と小の便所を使いかけ用料製造に協力することに決定。

10月4日　備北だより14号の読み合

種、価格、無農薬であること、今後定期的にやりたいこと等刷り、配布。ゴザ、マイクへテープレコーダーし、プラカードへ弥栄之郷共同体・生産物直販と大書し、雨が降った場合に備えてテントを大学から借りようとしたが、サークルにしか貸目というので断念——

さて、以上のような準備で直販をやったのですが、感想、①、ビラの威力は大きかった。車で指定した場所に行くとおばちゃん等が買物カゴをぶら下げて待ってくれてはった。↓感想。②、時々松江市内でやってる——青年団の安売りと違うんやということを主婦に理解してもらうこと、それには、回を重ねることと、ビラの重視 ③一ケ所では、売れ残りは出さないという至上命令からやはりまずい。今後、3ケ所でやっていくことを確認。④ 主婦の評判は上々。キャベツなんか味が違うときで言っているとか。⑤ 価格は、市内のスーパーよりいくぶん安くという事でビラに刷っていたけど、結局弥栄側の意向で更新。中間搾取への挑戦・無農薬等の弥栄の運動と市場価格とは何の関係もない。今後、価格は一切弥栄に決定してもらうことに提議一決。

さて、松江での直販の今後ですが、人脈もあり、場所もある、直販を根付かせる可能性は充分にあると思う。その為には、蟻の巣堤を穿つごとく小さな努力を積み重ねる以外に道はないようです。昔、中国の大人は言いました、千里の道も一歩より始まる。

（はしもと）

弥栄共同体では、市価情報（ありたのとこでは）を集めています。御協力下さい。大根一本いくら？

せと弓匠の商標について話し合う。

10月15日 恒例の人民工作。

10月16日 ヤマシの両親が突如来る。ギョーザで美しい人のビール4本にありつける。

10月17日 イナちゃんの両親が突如来る。一泊して帰る。

10月18日 人民会社の学習会。人民会社建設の過程と照らし合わせていかに弥栄をコミューン化するかを話し合う。共同出荷物、銭湯、赤ちょうちん、定期バスなどアイデア豊富

10月19日 広島直販。

10月20日 隣の部落の秋祭りを見に酒一本を下げて夜の10時頃から出かける。オ8番目の崇既者トラコバがイスラエル行きを断念して共同体に参加。

〈今後の予定〉

10月20日 広島直販。部落の自治会長を広島直販に連れて行き、消費者協会の幹部と話し合いの場をもつ。

10月22日 婦人会の集りで直販についての説明会を開く。

10月25日 第2回松江直販。

10月29日 田ぼやしの日。ヤマシの晴れの舞台。県知事と握手できるぞ。

10月31日 広島直販。ヤマシ東京へ。

11月3日 弥栄村運動会。全員参加。

11月10日 広島直販。今年一年間の直販の総括と消費者協会と話し合う会をもつ。

11月11日 農谷部落の秋祭り。

11月12日 出稼ぎヤニ陣大阪へ。

11月20日 広島直販。

11月25日 出稼ぎオニ陣大阪へ。

「出稼ぎコミューンは大阪でガラスふきと、デパートの配達を仕事にする予定。手伝ってくれる人は「一報を。弥栄にはヤマシが留守番です。

柳下村塾から何を学ぶか

―共同体でなければならない根本原理とは―

たった一日半の訪問だったけれど、私はとても大きな多くのことを持ち帰った。しかし、それはそのままではいつまでも借りものでしかない。それらを私が、今の私の場でどう具体化していくかが問題であろう。

その生活と闘争

「…果てしなく〝柳川〟と〝教育実践〟と自己を下降させてゆくであろう。そして、〝柳川〟と〝教育〟を重く所有することによって時代の普遍性への肉薄を試みつづけるであろう」と、柳下村塾はその闘争を宣言している。実際、彼らは「百年かけて柳川を変える」と本気でいう。それが全く空々しく聞えないのである。

柳下村塾は、次のパートから成り立っている。三教師の裁判闘争を行い、機関紙として「柳城通信」を発行している〈伝習館救援会事務所〉、五人の保母さんが三〇余名の〇～五才児を預っている〈託児所〉、そして中高生の〈英修塾〉(学習室)と、〈印刷出版部〉の四つである。

それぞれのパートで働いている人がすべて塾で一緒に住めるのが理想だが、狭くて無理なので、今は三夫婦と二人が塾に住み、他の人はすぐ近くに住んでいる。仕事が終わると全員で夕食、それから毎日[illegible]半にその日一日の総括。その後で、木曜は〈女性史研究会〉、金曜〈駅前宣〉、土曜〈老人宿〉というスケジュールである。また、日曜日には〈市内宣〉が午後の日課となっている。

〈女性史研〉では、高群逸枝の「女性の歴史」をテキストに、時の流れのたて軸と、文学・政治・経済・教育などさまざまの横軸をからませた幅広い研究を、被圧者〈女〉の視点から研究していこうとするものである。

〈老人宿〉は、教育・保育・差別・公害の四つを順々にテーマとして、どの年令層からも自分なりの問題提起をして話し合おうというミーティングである。

十年間は絶対に続けるという遠大区画に分け、各週一地域に専業みビライしていく、大量ビライ」と、

もっと地域を区切って個別訪問し、腰をすえてその家の人と裁判のことなど話しこみ、パンフを売りビラを渡してくるというものである。

「ここでは今まで、全国からみえるお客さんたちと話をすることでつながりを拡げてきたんよ。先生たちは、ほんとていねいに話してこられたもんね。」保母の三木さんが私にこんなことを言った。彼女は印刷出版部で働くダンナさんと塾で生活を始めて一年だという。そして、彼女のお姑さんは託児所の責任者である。三木さんはこう続けた。「でも最近は、それ以上に自分たちの勉強や活動のための時間を大切にしようとしている」と。老人宿には、各地から色んなお客さんが来ていたが、いわばお客さんにはおかまいなし。自分たちの今かかえている問題、やりたい、やろうとしている運動のことで話し合う時間も頭の中もいっぱいだという雰囲気だった。しかし、不思議なことに、私はその中で全然疎外感をうけなかった。柳下村塾を訪れた人間と、そこで生活・闘争している人間との違いは、決定的なものである。しかし、それぞれの関わっている具体的な運動は違っても、その問題の本質や問題意識の面では通じ合えるだろうし、また、違ったところでの実践が非常に具体的にプラスになるものだと思う。

私が女だから、こういう感じ方をしたのだろうが、「ここでならへこういうところでならＶ私も子供を産みたい」とはっきり感じた。それは、子供を産み、育てられる環境・世の中を自分たちの手で創っていこうとしていること、そして、その共同体において、女が独自の不換の役割を、共同体自身の重要な機能を果しているということだと思う。私にはこれが、柳下村塾の決定的な要因だと思える。

彼らは徹底的に、おごり・気負い・エリート意識を否定し、謙虚に来訪者や地域の人たちから学び、自らが楽しく生活＝闘争をしている。〈生活＝闘争〉があたりまえ、そうでないと生きられないのである。だから市民社会に向けては徹底して情宣する。それは相反したことではなく、その着眼の中からしか始められないのであろう。

ほぼ二年間も〈共同体〉という言葉を使ってきた私が、別段共同体を名乗りはしていない柳下村塾へ行って初めて、「共同体でなければならない根本原理」を目で見、肌で感じ

ることができたように思えた。

私が友人と二人で柳下村塾を出た時、もうあたりは暗くなっていた。「ほまで近かったし、歩こか？」「うん」私たちはほとんど話もせずに駅まで歩いた。今、胸の中にいっぱいにつまっている柳下村塾の印象を自分の中で大切にふくらませておきたかったのだろう。幼稚園の先生である彼女は、しきりに「うちの幼稚園の子がかわいそうに思えてきたわ」とくり返していた。私は、柳下村塾で会った人、一人一人の顔を思い出しながら、何ともいえない満足感とともに、さわやかなファイトがあふれてくるのを感じていた。

（芳原 和代）

いろりばた

＊新装開店！ 編集だよりが、ただのへ便り＞でなく、読み物としてまた理論の構築の場として、生まれかわりました。そしてそれ自身が運動なのです。あなたは、原稿を寄せることによって、また製作をともにすることによって、この運動に参加して下さい。

＊こむうなスケジュール

十一月三日・薬草取りハイキング・AM十一時こむうな塾集合・お弁当自参のこと

十一月四日・こむうな塾オープン母親懇談会・参観、お茶くみ歓迎

十一月十一日・出嫁ぎコミューン開始

十一月十八日（予）・百人委定例会

＊怪談・弥栄之郷共同体の陰謀を語しあうため、去る九月二十四日、東京集会を開きました。参加者は二十余名。弥栄の現状を説明した後、「外部への問題提起ばかりで内部の問題を見失なうのではないか」「路線変更か？」「『弥栄とどう関わるか』という問題設定は正しいか？」などについて話しました。東京でも独自の動きをはじめようと云う声もナラホラ。

＊弥栄の常駐者が八人にも増え、その生活・斗争は、日々変貌しているようです。あなたの目でその姿を確かめて下さい。

＊こむうな塾で、社会科をはじめます。暗記もののカラを破って、「考える社会科」を、めざしています。乞御期待！

＊秋♪思わず口に出るガンバレ！ガンバレ！